

## 月船禅慧の研究(四)

四回に分けて月船禅慧の『武溪集』に訓註を施してきた。しかし、今年度は、ページ数の都合上、書き下しを主とし、註に関しては、後日を期することにした。また、『武溪集』に註について、月船の弟子であり、鎌倉の円覚寺の中興開山である誠拙周樗の朱を入れた『武溪集』が現存していることが判った。この註を見ることによって今まで不明であったことが詳細に解明できると考える。又、『武溪集』の訓註については、後日一冊にまとめることが決まっているので、註はその時に譲ることにした。

平成十年、臘八大撰心前日脱稿。

朝陽

山舍靜朝暉 傍窓補衲衣 停針纔欲語 風起白雲飛

朝陽

### 鈴木省訓

山舍、朝暉<sup>(1)</sup>静かなり。窓に傍うて衲衣を補す。

針を停めて纔かに語らんと欲すれば、風起きて、白雲飛ぶ。

(1)朝日のあたる山の東面。朝日。註に「相伝う、昔、好事の漢有り。寺に入りて見る。僧の朝陽に向つて衲を補し、月に対して経を誦す。其の清閑の儀相を愛して画いて以て図と爲すのみ」とある。

對月

殘經猶未了 月下坐琅琅 應是唐人譯 欲知義味長

對月<sup>(1)</sup>

殘經、猶未了せず。月下坐して琅琅<sup>(2)</sup>。

應に是れ唐人<sup>(3)</sup>の譯なるべし。義味の長きを知らんと欲す。

(1)前註と同じ。(2)古帆慈禪師の偈に「千古金沙灘上の水、水琅々として猶誦經の声を作す」とある。金属や玉がたがいにふれて鳴る音のさまを琅々という。(3)虚堂の頌に「依然として我に唐人の訳を還し、始めて人の是れ梵書なりと知る有り。」とある。

天照太神

半面纔現 輝騰乾坤 扶桑國裏無人辨 喚作光明遍照尊

<sup>(1)</sup>天照太神

<sup>(2)</sup>半面纔かに現ず。乾坤輝騰す。

扶桑國裏、人の辨ずる無し。喚んで光明遍照尊と作す。

(1)『本朝高僧伝』『神仙』の部に「皇太神宮は伊弉諾の尊、伊弉冊の尊の御子、天照皇太神の廟なり。聖武皇帝、東大寺を創せんとして瘡心思付したまう。国家神に奉じ、今、佛宇を営む。知らず、神意に戻るやいなや。云々。帝夢に太神告げて曰く、日輪は是れ毘盧遮那なり。此の意を得て宮興を為せんと。日輪の相を現す。其の光赫如たり」とある。

菅相

雲蔽白日 雷轟紫宸 千古萬古 自在天神

菅相

雲、白日を蔽う。雷、紫宸に轟く。

千古萬古。自在天神。

又 宋渡

七字天封懸日月 一枝春色灑山河 自從宋域求衣法 六十餘州寐語多

又（渡宋）

七字の天封、日月を懸く。一枝の春色、山河に灑ぐ。宋域に衣法を求めし自從り、六十餘州、寐語多し。

又

太宰府中甚時節 大唐國裏獨從容 若非天下梅花主 應是扶桑文字宗

又

太宰府中、甚んの時節ぞ。大唐國裏、獨り從容。若し、天下梅花の主に非ずんば、應に是れ扶桑文字の宗なるべし。

天満宮 圖華表前有梅松 二樹不見見二神祠

風聲松老 月色梅癭 不知神之所在 於彼乎於此乎

天満宮 （圖に華表の前に、梅松二樹有り。神祠を見ず）

風聲松老う。月色梅癭る。

神の在す所を知らず。彼に於いてか、此に於いてか。

巴陵和尚 住大龍寺

大龍實無眼 又不在澄潭 何處笛聲起 千峯色若藍

巴陵和尚 (大龍寺に住す)

大龍、實に眼無し。又澄潭に在らず。

何れかの處にか笛聲起る。千峰、色藍の若し。

絹因和尚 諱紹熙 松巖裁長老請

青山終不老 白髮獨從容 應是絹熙處 手栽帶雨松

絹因和尚 (諱は紹熙。松巖裁長老の請)

青山終に老いず。白髮、濁從容。

應に是れ絹熙の處なるべし。手ら帶雨の松を栽ゆ。

空印和尚 諱圓虛 嗣子 滅道長老請

一印印破 虛空不圓 築著磕著 八倒七顛 披襟清泰

置枕萬年 寧聲有子 偷得爺錢 按圖買馬 東牽西牽  
叱 笑罷青山暮雨前

空印和尚 (諱は、圓虛。 嗣子の滅道長老の請)

一印に印破す。虛空圓ならず。築著磕著。八倒七顛。襟を清泰に披き、枕を萬年に置く。

寧馨に子有り。爺錢を偷み得たり。圖を按んじて馬を買う。東に牽き、西に牽く。叱。

笑い罷む、青山暮雨の雲。

泰龍和尚

小往大來 野老眉開 鱗皴拄杖 忽起雲雷 雲雷起  
虛空消殞 鐵山摧

泰龍和尚

小往き、大來る。野老眉開く。鱗皴たる拄杖。

忽ち雲雷を起す。雲雷起る。虛空消殞し、鐵山摧く。

白隱和尚

一手獨拍 作「什麼聲」 星飛電轉 刀山火坑 欲見其面  
惡聞其名 腳跟若是踟躕 不免荊叢毒藥生

白隱和尚

一手獨拍。什麼の聲をか作す。星飛び、電轉ず。刀山火坑。其の面を  
見んと欲す。

其の名を聞くを惡み、腳跟、若し是れ踟躕し去らば、免れず、荊叢毒  
蕊の生ずることを。

性海和尚

覺湛澄圓 吸盡百川 無照無寂 白浪滔天  
滔天白浪難迴避 人在巨鼈背上眠

性海和尚

覺湛澄圓。百川を吸盡す。照無く、寂無し。白浪滔天。  
滔天の白浪、回避し難し。人は巨鼈背上に在って眠る。

要關和尚 大道山長  
安寺中興

有要有玄關路難 誰言大道透長安

伽梨撩亂春雲暖 一炷檀香對翠巒

要關和尚 (大道山長安寺の中興)

要有り、玄有り、關路難し。誰か言う。大道長安に透ると。  
伽梨撩として春雲暖なり。一炷の檀香、翠巒に對す。

鐘銘

乾坤大器一摸脫 生佛由來絕度量  
誰把杵頭先下手 夢回豐嶺五更霜

鐘銘

乾坤の大器、一摸に脱す。生佛由來、度量を絶す。  
誰か杵頭を把んで、先ず手を下す。夢は回る、豐嶺五更の霜。

降龍鉢

一鉢水清冷 火龍隨厥中 跳出跳不出  
千山萬山雨濛濛

降龍鉢

一鉢、水清冷。火龍、厥の中に墮す。  
跳出、跳不出。千山萬山、雨濛濛。

如意

一箇閑家具 通身是鐵作 晉人用處親 擊碎珊瑚樹

如意

一箇の閑家具。通身是れ鐵作。

晋の人、用處親し。擊碎す、珊瑚樹。

象

普賢不騎 放之峨嵋 叱 鼻孔恁麼垂

象

普賢騎らず。之を峨嵋に放つ。叱。

鼻孔恁麼の垂る。

虎

爪牙、山に靠り。聲光、地に振るう。  
漢家、人有り。彼の深器を思ふ。

鷺

水碧沙明 斂影收聲機若不息 豈有魚行

鷺

水碧に沙明なり。影を斂み、聲を収む。  
機若し息まば、豈に魚の行く有らんや。

白澤

汝能言語 誰卜吉凶 軒轅東狩 其怪潛蹤

白澤

汝、能く言詮す。誰か吉凶を卜せん。  
軒轅東狩。其の怪、蹤を潜む。

虎

爪牙靠山 聲光振地 漢家有人 思彼深器

牧童

牛背晚風 笛裏明月 歸不歸 前溪橋斷路蕪沒

牧童

牛背の晚風、笛裏の明月。  
歸えるや、歸えらざるや。前溪橋斷つて、路蕪沒。

又

水足艸足 牛且欲眠 我家不遠 羌笛聲聲落日前

又

水足る、艸足る。牛且つ眠らんと欲す。  
我が家遠からず。羌笛聲聲、落日の前。

廓庵十牛圖見牛

青山鎖翠 何處回避 眨上眉毛 不出異類

廓庵十牛の圖、見牛

青山、翠を鎖す。何れの處にか回避せん。  
眉毛を眨上すれば、異類を出さず。

十牛一軸

不是妙兮不是玄 更無一法可攀緣  
古人特地生頭角 塘挨南邊復北邊

十牛一軸

是れ妙ならず、是れ玄ならず。更に一法の攀緣す可き無し。  
古人特地に頭角を生ず。塘探す、南邊復た北邊。

梅

一枝復一枝 香骨玉爲肌 驛使今將去 隴頭寄與誰

梅

一枝復た一枝。香骨、玉を肌と爲す。  
驛使、今將に去らんとす。隴頭、誰にか寄與せん。

菊

陶令罷官還 籬花霜後斑 白衣殊未到 滿目是青山

菊

陶令官を罷めて還る。籬花、霜後斑なり。  
白衣、殊に未だ到らず。滿目はれ青山。

芭蕉

身如芭蕉 中無有堅 堅固欲問 秋風淒然

芭蕉

身は芭蕉の如し。中に堅有ること無し。  
堅固問わんと欲すれば、秋風淒然。

茄子

歳入有餘 紫茄占秋 乃煎乃炙 飽則僂休

茄子

歳入、餘有り。紫茄、秋を占む。  
乃ち煎じ、乃ち炙る。飽けば則便ち休す。

骷體

有識無識 骷體著地 霜白風寒 急須迴避

骷體

有職無職。骷體地に著く。  
霜白く、風寒し。急に須く迴避すべし。

又

一箇骷體 撐天拄地 無染無染 何處迴避

又

一箇骷體。天を撐え地を拄う。  
無染無染。何れの處にか迴避せん。

又

形骸在此 其人何在 宿雨初收 遠山如黛

又

形骸此に在り。其の人何んが在らん。  
宿雨初めて収まって、遠山、黛の如し。

神農

繼天立極 上古聖神 籬根下採一莖艸  
能殺人兮能活人

神農

天を継ぎ極に立つ。上古の聖神。  
籬、根下に一莖艸を採る。能く人を殺し、能く人を活かす。

老子

萬物之母 天地之根 青牛關外去 狼藉五千言

老子

萬物の母。天地の根。  
青牛關外に去る。狼籍たり、五千言。

太公望

非龍非影 萬世宗師 西伯未到 風捲釣絲

太公望

龍に非ず、影に非ず。萬世の宗師。  
西伯未だ到らず。風釣絲を捲く。

顏回

聞一知十 日至月至 不改其樂 瓢飲簞食

顏回

一を聞いて十を知る。日に至り月を至る。  
其の樂を改めず。瓢飲み簞食う。



朱買臣

不治家產 擔薪誦書 嘖 待詔公車

朱買臣

家産を治せず。薪を担ぎ、書を誦す。嘖。  
詔を公庫に待つ。

郭林宗

貞不絶俗 隱不違親 呵呵 時人折巾

郭林宗

貞、俗を絶たず。隱、親に違せず。  
呵呵。時の人、巾を折る。

三笑圖

陸生何處去 陶令醉如泥 笑傲人間世 鐘聲過虎溪

三笑圖

陸生、何れの處にか去る。陶令、酔うて泥の如し。  
笑傲す、人間の世。鐘聲、虎溪を過ぐ。

鍾馗

雙瞳懸日月 一劍動星辰 果然天下無妖孽  
應是明皇夢裏人

鍾馗

雙瞳、日月を懸く。一劍、星辰を動ず。  
果然として天下に妖孽無し。應に是れ明皇夢裏の人なるべし。

又

藍袍風動 利劍霜飛 能除虛耗 天日增輝

又

藍袍、風動き。利劍、霜飛ぶ。

能く虚耗を除いて、天日輝きを増す。

東坡

五祖戒公一目盲 天堂地獄路縱橫  
誰家老嫗猶爲夢 終喚東坡居士名

東坡

五祖の戒公、一目盲ず。天堂地獄、路縱橫。  
誰が家の老嫗か、猶夢を爲す。終に東坡居士の名を喚ぶ。

斷崖再生字寶曇

昧出胎兮迷隔陰 義公一杳杳難尋  
朝來天界相逢著 碌碌寶曇恨轉滾

斷崖再生、寶曇と字す

出胎に昧く、隔陰に迷う。義公一び去って、杳として尋ね難し。  
朝來、天界に相逢著す。碌碌たる寶曇、恨み轉た深し。

西行

西行不歇 東歸甚時 山遙水遠 孤筇遲遲

西行

西行歇まず。東歸甚れの時ぞ。  
山遙かに水遠し。孤筇遲遲。

龍頷和尚忌

一自渾身沒九淵 驪珠燦爛掌中圓  
相逢幾度論眞假 機外星飛白玉鞭

龍頷和尚忌

一び渾身、九淵に没して自り、驪珠燦爛、手中に圓かなり。  
相逢うて幾度か眞假を論ず。機外、星飛ぶ白玉の鞭。

大雅和尚忌 諱省音

大雅清風聞不聞 無音韻處調相分  
機前頼有石人和 江上青山多白雲

大雅和尚忌 (諱は省音)

大雅の清風、聞くや、聞かずや。音韻無き處、調べ相分かつ。  
機前、頼に石人の和する有り。江上の青山、白雲多し。

先師忌

春風拂檻柳絲輕 上有黃鸝帶雨鳴  
口縫豈應向人啓 從來孝子諱爺名

先師忌

春風、檻を拂つて、柳絲輕し。上に黃鸝の雨を帶びて鳴く有り。  
口縫、豈に、應に人に向つて啓くべけんや。從來孝子、爺の名を諱す。

續宗和尚忌

櫻岡開祖

驢邊滅卻馬邊傳 笑倒滹沱河北禪  
唯此宗風續不續 櫻岡春色自年年

續宗和尚忌 (櫻岡の開祖)

驢邊に滅却し、馬邊に傳う。笑倒す、滹沱河北の禪。  
唯此れ宗風續くや、續かざるや。櫻岡の春色、自ずから年年。

月庵和尚戢化

一片清光秋作輪 空齋獨坐掩松筠  
夜闌何處笳聲發 白水青山不見人

月庵和尚の戢化

一片の清光、秋輪を作る。空齋獨坐、松筠を掩う。  
夜闌、何れの處にか笳聲發す。白水青山、人も見ず。

義道和尚戢化

鼻中有肉鈴

不會隻字誦心經 始見鼻中有肉鈴  
鈴自落兮人自去 不會隻字誦心經

義道和尚戢化 (鼻中、肉鈴有り)

曾て隻字も心經を誦せず。始め見る、鼻中肉鈴有ることを。  
鈴自ずから落ち、人自ずから去る。曾て隻字も心經を誦せず。

偶成

我法妙難思 當機石火遲 微風花片片 細雨艸離離  
黃面不會會 少林那得知 愁人家萬里 倚杖夕陽時

偶成

我法妙難思。當機、石火遲し。微風、花片片。細雨、艸離離。  
黃面曾て會せず。少林那んぞ知ることを得。愁人、家萬里。杖に倚る  
夕陽の時。

又

澄潭兼激浪 竟不見蒼龍 脩竹微風動 晴窓睡正濃

又

澄潭と激浪と。竟に蒼龍を見ず。  
脩竹、微風動く。晴窓の睡、正に濃なり。

送僧

月滿關山露氣清 萬家砧杵曉聲聲  
慇懃好去二三子 不敢等閑說此情

僧を送る

月、關山に滿ち、露氣清し。萬家の砧杵、曉聲聲。  
慇懃に好し去れ、二三子。敢えて等閑に此の情を説かず。

又

岸艸汀花春幾多 孤帆影瘦大江波  
松牕日落香煙靜 裊裊白雲爭奈何

又

岸艸汀花、春幾多ぞ。孤帆の影瘦す、大江の波。  
松牕、日落ち香煙靜なり。裊裊たる白雲、爭奈何せん。

又

佛字不喜聞 無佛又紛紜 逢人勿錯舉 楊花摘贈君

又

佛の字、聞くことを喜ばず。無佛、又紛紜。  
人に逢わば、錯つて挙すること勿れ。楊花、摘んで君に贈る。

又

十載江西月 秋風捲衲衣 人言超物外 白髮坐依依

又

十載江西の月。秋風衲衣を捲く。  
人は言う、物外に超うと。白髮挫に依依。

又  
春風颼颼 春艸離離 欲贈無物 途中善爲

又  
春風颼颼。春艸離離。  
贈らんと欲すれば物無し。途中善爲。

又  
好太天台又五臺 鷓鴣啼處百花開  
別無行脚些兒事 不許袈裟裹艸鞋

又  
好し去るに、天台又五臺。鷓鴣啼く處、百花開く。  
別に行脚些兒の事無し。許さず、袈裟に艸鞋を裹むことを。

又  
南方佛法好咨詢 誰道爐頭無主賓  
枯木巖前須選路 臺山婆子欲瞞人

又  
南方の佛法、好し咨詢するに。誰か道う、爐頭主賓無しと。  
枯木巖前、須く路を選ぶべし。臺山の婆子、人を瞞ぜんと欲す。

又  
柳暗花明百十城 幾回郊外逐流鶯  
朝來撥艸妙峯頂 好引德雲別處行

又  
柳暗花明なり、百十城。幾回か郊外、流鶯を逐う。  
朝來、艸を撥す、妙峯頂。好し、德雲を引いて別處へ行く。

又  
朝雨初晴客夢醒 飄然振錫出幽局  
慙慙未舉臨岐句 留待春風柳眼青

又  
朝來、初めて晴る、客夢醒む。飄然として錫を振るって幽局を出づ。  
慙慙に未だ举せず、岐に臨む句。留めて春風柳眼の青きを待つ。

又

秋風海上白雲橫　月裏歸鴻度洛城  
二十年來膽如斗　豈應容易向人傾

又

秋風海上、白雲横たう。月裏の歸鴻、洛城を度す。  
二十年來、膽斗の如し。豈に應に容易に人に向つて傾くべけんや。

又

四海五湖皇化裏　衲僧高歩進竿頭  
長沙門外人如問　澧水朗山恨不休

又

四海五湖、皇化の裏。衲僧の高歩、竿頭に進む。  
長沙門外、人如し問わば、澧水朗山、恨み休せず。

又

江頭明月賦中寒　一錫秋風行路難  
此調適來猶記得　臨岐欲舉太無端

又

江頭の明月、賦中に寒し。一錫秋風、行路難し。  
此の調適來、猶記得す。岐に臨んで挙げんことを欲す、ただ端無し。

又

一片閑雲起薜蘿　江城雨色夢中過  
烏藤從此諸方去　莫道農家口轉多

又

一片の閑雲、薜蘿より起る。江城の雨色、夢中に過ぐ。  
烏藤、此從り諸方に去らば、道うこと莫れ、農家、口轉た多しと。

又

昨夜秋鴻度海煙　鳴空金錫去飄然  
十年消息臨岐句　懶舉青山暮雨前

又

昨夜、秋鴻海煙を度る。空に鳴る、鐘錫去つて飄然。  
十年の消息、岐に臨む句。挙するに懶し、青山暮雨の前。

又

冬不寒兮春不飢 清風步步望京師  
廬陵米價人如問 看取山前麥熟時

又

冬寒からず、春飢えず。清風步步、京師を望む。  
廬陵の米價、人如んと問わば、山前麥熟の時を看よ。

又

江西秋月照 賓主不相欺 拂袖之何處 清風滿地吹

又

江西、秋月照らす。賓主相欺かず。  
佛袖して何んの處にか之く。清風、滿地に吹く。

又

吾聞古君子 送人其言至 行行復行行 有言好掩耳

又

我れ聞く、古の君子。人を送るに其言と至る。  
行く行く、復行く行く。言と有らば好し、耳を掩え。

又

誰家吹笛雨成霖 五月海南多毒淫  
行矣不會爲君說 老僧猶在武溪深

又

誰が家の吹笛ぞ、雨霖を成す。五月の海南毒淫多し。  
行け、曾て君が為に説かず。老僧猶武溪の深に在り。

又

古人到此不肯住 途路力疲白日昏  
拄杖千峯萬峯去 何山石上拂苔痕

又

古人、此に到つて肯て住せず。途路、力疲れて白日昏し。  
拄杖、千峯萬峯に去らば、何れの山の石上にか苔痕を拂わん。

又

楊柳青春幾多 歸鴻和雨度關河  
而今爲舉臨岐句 此去諸方問奈何

又

楊柳青青、春幾多ぞ。歸鴻、雨に和して關河を度す。  
而今、爲に挙す、岐に望む句。此を去って、諸方奈何んと問え。

又 破夏  
來去

黃檗山頭破夏來 河南河北又何之  
知君前路疑情切 應是杜鵑叫月時

又 (夏を破し來たり去る)

黃檗山頭夏を破し來る。河南河北又何んが之く。  
知る、君が前路、疑情の切なることを。應に是れ杜鵑月に叫ぶ時なるべし。

送人入京

玉笛飛聲暮色寒 關山明月望長安  
鳳凰城外重回首 萬仞芙蓉雪裏看

人の京に入るを送る

玉笛、聲を飛ばして暮色寒し。關山の明月、長安を望む。  
鳳凰、城外重ねて首を回らさば、萬仞の芙蓉、雪裏に看ん。

送僧之江州

一夜烏藤狹路逢 冷冰冰裏謾從容  
登樓元是非吾土 月落琵琶湖上鐘

僧の江州に之くを送る

一夜、烏藤狹路に逢う。冷冰冰裏、謾に從容。  
登樓、元と是れ吾が土に非ず。月は落ち、琵琶湖上の鐘。

送人之江都

秋風蕭瑟起 匹馬出鄉關 武野乾坤盡 更無吐月山

人の江都に之く送る

秋風、蕭瑟として起る。匹馬、鄉關を出づ。



武野、乾坤盡く。更に月を吐く山無し。

送人之金華

海上金華霞色開 無人不道牧羊回  
君今去見黃家子 爲報秋霜鏡裏催

人の金華に之くを送る

海上の金華、霞色開く。人の羊を牧して回ると道わざるは無し。  
君、今去つて黃家の子を見れば、爲に報ぜよ、秋霜鏡裏に催すと。

送僧之維摩會

金毛出窟長威憚 踢倒須彌芥裏行  
去見毗城癡愛老 應聞一默作雷鳴

僧の維摩會に之くを送る

金毛窟を出で威憚を長ず。須彌を踢倒して芥裏に行く。  
去つて毘城の癡愛老を見れば、應に一默の雷鳴を作すを聞くなるべし。

送僧之駿州

白髮秋風笛裏生 雙峯明月度關城  
烏藤親問鵠林路 獨掌由來不浪鳴

僧の駿州に之くを送る

白髮、秋風笛裏に生ず。雙峯の明月、關城を度す。  
烏藤、親しく問う、鵠林の路。獨掌、由來浪りに鳴らず。

送僧歸鄉

聞道古田老善師 言論風旨亦優爲  
而今又見慈明調 一別歸鄉落井槌

僧の郷に歸えるを送る

聞き道う、古田の老善師。言論風旨も亦優爲。  
而今、又見る慈明の調。一別歸郷、井に落つる槌。

送小師

憐爾歲時猶未央 楚王城畔與偏長  
出門何處無芳艸 不効騷人慕舊鄉

小師を送る

憐れむのみ、歲時猶未央ならざること。楚王城畔、興偏に長し。

門を出づれば何れの處にか芳艸無からん。騷人に効つて舊郷を慕わざれ。

送無業歸山 諱正禪

由來無業無生死 各自有禪有正邪  
無業無禪懶眠足 故山嵐翠灑袈裟

無業の山に歸えるを送る！ （諱は正禪）

由來、業無ければ生死無し。各自に禪在れば正邪有り。  
無業無禪、懶眠足る。故山の嵐翠、袈裟に灑ぐ。

窮子

借問誰家子 玲峴五十年 色空談卽卽 事理說玄玄  
欲窮如來教 擬參乃祖禪 日夜數他寶 囊中無一錢  
爲八風所牽 南村兼北里 尋水復望煙 老矣眉如雪  
長安路八千 到頭呼不返 鐘動夕陽前

窮子

爲六塵所染

借問す、誰が家の子ぞ。玲峴五十年。色空、卽卽を談ず。事理、玄玄を説く。如來の教えを窮めんと欲し、乃祖の禪に參ぜんと擬す。日夜、他の寶を數え、囊中に一錢無し。六塵と爲して染せらる。八風と爲して牽からる。南村と北里と。水を尋ね復煙を望む。老たり、眉雪の如し。長安路八千。到頭呼べども返らず。鐘は動く夕陽の前。

寄思益經會裏諸道友

國師水椀在機前 忽見春花落講筵  
菩薩光中無異相 不知消息爲誰傳

思益經會裏の諸道友に寄す

國師の水椀、機前に在り。忽ち見る、春花の講筵に落つるを。  
菩薩光中、異相無し。知らず、消息誰が爲にか傳う。

指印住東明

海印發光知甚處 塵勞競起復多時  
烏藤三十今猶在 欲寄東明討便宜

指印、東明に住す

海印光を發す、甚れの處ぞ。塵斷競い起る、復た多時。

烏藤三十、今猶在り。東明に寄せんと欲して、便宜を討つ。

孤隣住永安

青山面面白雲飛 坐斷永安第一機  
洛浦當時三寸密 滿堂五百共相依

孤隣、永安に住す

青山面面白雲飛ぶ。坐斷す、永安の第一機。  
洛浦、當時三寸密なり。滿堂の五百、共に相依る。

娛桂

少林從一擢新條 已覺天香雲外飄  
若使吳剛能運斧 竺乾懸記重昭昭

娛桂

少林一び新條を擢でし従り、已に覺ゆ、天香雲外に飄ることを。  
若し吳剛をして能く斧を運ばさ使めば、竺乾の懸記、重ねて昭昭。

無門

四方八面絶遮欄 狗吠鷄鳴不自瞞  
彌勒樓前月如畫 指頭容易向人彈

無門

四方八面、遮欄を絶す。狗吠え鷄鳴き、自ら瞞せず。  
彌勒樓前、月昼の如し。指頭、容易に人に向つて彈ず。

峨山

疊嶂連岡來自岷 三峯突起摩蒼旻  
好將毛孔普賢境 送與西川登眺人

峨山

疊嶂連岡、岷自り来る。三峯突起して蒼旻を摩す。  
好し、毛孔普賢の境を將てす。送與す、西川登眺の人。

大泉

滾無源底廣無際 分作百川只麼流  
澄不清兮淆不濁 從教凡聖日沈浮

大泉

深くして源底無し、廣くし際無し。分れて百川と作して、只麼の流る。

澄ませども清まず、淆ぜども濁らず。從教あれ、凡聖の日に沈浮すること。

偶成

集方儲藥病人夥 剖斗折衡民益爭  
孤客十年歸不得 誰家釣艇月邊橫

偶成

方を集め、藥を儲ければ、病人夥く、斗を剖り、衡を折れば、民益々争う。

孤客十年、帰えることを得ず。誰が家の釣艇ぞ、月邊に横う。

又

無言可對已饒舌 一物不爲事轉繁  
秦晉古今消息絕 漁郎借路武陵源

又

言の對す可き無し、已に饒舌。一物も為さず、事轉た繁し。  
秦晉古今、消息絶う。漁郎路を借る、武陵源。

自讃

古人不會歇 豎拂復拈槌 春睡晴牕暖 微風捲柳絲

自讃

古人曾て歇まず。豎拂復た拈槌。  
春睡晴牕、暖なり。微風柳絲を捲く。

又

瞎禿奴 何面觜 驢相若 馬相似  
無慚無愧又惺惺 齡逼古稀猶未死

又

瞎禿奴。何んの面觜ぞ。驢相若けり。馬相似たり。  
無慚無愧、又惺惺。齡、古稀に逼つて、猶未だ死せず。

又

富若有神助 貧似有鬼禍 貧富今不到 好一場懺懺

又

富は神助有るが若し。貧は鬼禍有るに似たり。  
貧富、今到らず。好し、一場の懺懺。

又

老將知 耄及之 早晨喫白粥 至今又覺飢

又

老いて將に知らんとす。耄、之に及ぶ。  
早晨、白粥を喫す。今に至り又飢えを覺ゆ。

又

洞門立五位 濟家説三玄 咄這不唧啗  
無位亦無玄 支杖暮天月 待風古渡船  
何處去 昨夜闍王索飯錢

又

洞門に五位を立つ。濟家に三玄を説く。咄。這の不唧啗。位無く亦玄  
為し。

杖を支う暮天の月。風を待つ古渡の船。何れの處にか去る。昨夜闍王、  
飯錢を索む。

又

有若似孔子 孔子似陽虎 瞎驢無尾巴 似則好收取

又

有若は孔子に似る。孔子は陽虎に似る。  
瞎驢、尾巴無し。似たらば則ち好し、收取せよ。

又

諸方轉凡成聖 者裏以頭換尾 叱 不是神不是鬼

又

諸方は、凡を轉じて聖と成す。者裏は頭を以て尾に換える。叱。  
是れ神ならず、是れ鬼ならず。

又

一片孤舟傍岸隈　華亭月色萬波開  
橈頭力盡秋蕭索　伶仃闍梨殊未來

又

一片の孤舟、岸隈に傍す。華亭の月色、萬波開く。  
橈頭力盡きて、秋蕭索。伶仃の闍梨、殊に未だ来たらず。

又

箇擔板漢　意欲何爲　敬佛不信  
憐兒無慈　囊裏飲氣　天外揚眉  
今日攔臂捉敗了　牽來好與頂門槌

又

箇の担板漢。意、何をか為さんと欲す。佛を敬して信ぜず。兒を憐れ  
んで、慈無し。  
囊裏に氣を飲む。天外に眉を揚ぐ。今日、攔胸に捉敗了。  
牽き来たつて好し、頂門の槌を與うるに。

又

渠不是我　我不是渠　無渠無我　是我是渠  
都來收放無憑據　鏡裏秋霜七十餘

又

渠れ是れ我れにあらず。我れ是れ渠れにあらず。渠れ無く、我れ無し。  
是れ我れ、是れ渠れ。都來收放、憑據無し。鏡裏の秋霜七十餘。

又

莫赤匪狐　莫黑匪烏　吾不識汝　汝能識吾  
又  
赤くして狐に匪ざるは莫し。黒くして烏に匪ざるは莫し。  
吾れ汝を識らず。汝、能く吾れを識る。

又

年及耄矣　一倒一起　雖無眼目　鼻孔相似  
又

年、毫に及ぶ。一倒一起。

眼目無しと雖も、鼻孔相似たり。

又

親者不來來不親 南牕高臥傲松筠  
今年七十有三也 冑把家私付別人

又

親しき者は来たらず、来るは親しからず。南牕高臥、松筠に傲る。  
今年七十有三なり。肯て家私を把つて別人に付せんと。

又

釋迦於前 彌勒於後 有麼 拈得鼻孔失卻口

又

前に釈迦あり。後ろに彌勒あり。  
有りや。鼻孔を拈得して口を失却す。

又

乾坤坐臥不相違 也識頽齡過古稀  
何處鐘聲林外盡 一簾秋雨自霏霏

又

乾坤坐臥、相違せず。也た識る、頽齡の古稀に過ぐることを。  
何れの處、鐘聲林外に盡く。一簾の秋雨、自ら霏霏。

又

可殺不可活 可活不可殺 殺活誰下手 頽齡七十八

又

殺す可し、活す可からず。活す可し、殺す可からず。  
殺活、誰か手を下す。頽齡七十八。

偶成

鳥不度兮獸不臨 天南天盡武溪濱  
老僧八十頭如雪 人道此居多毒淫

偶成

鳥度らず、獸臨まず。天南天盡きて武溪探し。  
老僧八十頭、雪の如し。人は道う、此の居、毒淫多しと。

遺偈

有過無過 不敢覆藏 末後大罪 驚殺閻王

武溪集卷下終

遺偈

有過無過。敢えて覆藏せず。  
末後の大罪。閻王を驚殺す。

武溪集 卷下 終